船をぎ押續きまりまを州風本湊へ乗入る此を十八里七月朔日順風を待く風本の湊ふ艤次二日數万騎の兵船悉く乗出し沖中ふ漕ぎ出ると雖も逆嵐暴くして船舟を覆さんとに故ふ諸將又舟を風本に戻し四日の夜ふ入て亥の刻計りに南嵐烈敷吹来て諸將風本を出船し五日戌の刻計りに對馬國鴨浦の岸ふ着船をしけ海路十八里六日對馬國三千の灘を渡し中の刻ばかりに對州豊浦浦ふ忍ぶを然る知ふ數万人の船泊共明日の日和を見切て只今渡船をもよおすべしと云ふまバ我劣トしと惣軍戌の刻ばかりに乗出る今ぞ日本の別をみるうと風波ふ身を任せ漫々ふ舟路の旅羽後左右ふ山をみく森々として滄海雲を漫し東西南北を弁へず船人共云ふ昏暗晩戌の刻より順風頻りふ吹て帆風ふ油断るけもバ漸高麗國の地ち近くばにるぶと山も見へさるるんど云し中ふ舟の表ふ高く黒く見ゆるを雲の山と疑ふ吉程ふ數人遠見し河を出て釜山海城の見物ふあり山也と勇けもバ船中の上下古郷ふ艦綱をとれ思をとそのふりけふ釜山海より三里沖なる椎木島の岸ふ寄て朝鮮の大軍船數百艘乗浮べ釜山海の湊口を堅ふ石火矢大筒を打響し島畑ふ露々る日本數萬の兵船海ふ三里跡ふ至順見し帆を卸ち波上ふゆ〻甲冑を帯し弓弦を引笛ふ茱を巡滄長刀を手ぶ〻船軍ふ取結べき旨各不孝の委に案のごと秀逢の日本丸太田花孫ち祇園丸の大船より相國の早鐘責ふれ味方

の兵船待ち不知に遂て順風に櫂を立て帆を揚て引のぼせ
猶遠く敵の大船を乗散し事故なく釜山浦に乗入る少し後れる
殿信濃守舟二艘敵の番船に取こまれ難儀の事出来り高
麗國釜山浦まで海路四十八里あり
大将軍秀吉公釜山浦に市入城あり越軍勢城より西の渚に
上り一手ごとに備を立已に七日の夜に入て芝居に篝を焼明し八日に
野陣をとのけ久く船中に立まくる兵を陸に下し矛をまぜ竹槍
誘湯洗ひ足をほぐし軍士の息を休む十四日全羅道の内竹島と
云所に渡る其海上十里叶浦より十七八町海路を隔て唐島と云浦あり
南北一里半東西三十五里あり此唐島と高麗の地其間一里半



路の海上なるに十五日の早天高麗の兵船尺寸の漕もあく船せき
て押並石火矢大筒打る音山海に響きたり敵番船の為體頗日
本船に比べ甚きもふし舟の長サ五六十間あり三尺四方四尺四
方の角材木を以て大貫作りに釘を作りて継目の合せ目に
内外とりチャンと云物を流しこまれば只焼物のごとくあり二階
三階に歩の板を敷渡し櫓の長サ八九間ある大櫓に水主八人右向
て押櫓を八人宛の櫓数を以て自由自在に押回し左右に
大弓石火矢棒火矢数を多して掛並べり其大弓の長サ四間ばかり三尺
廻りの材木を以て作りスヂと云ものを巻回りより合せ張
かけ有り其矢の長ケ二間餘り木を八寸四方に削り四人計の練

の三間羽を付二尺許上狹の石突をまげて機を以て二階三階乃舟矢倉より五丁ゞ外へ射放る其外半弓ラシン弓の射る狹炮烙火の役者一艘の其中に甲の緒を〆兵仗をわきはさんでる精兵二千三千人づゝ乘幾多艘と云數をもつて唐島迫門の海上八金數雷を欺て天地も崩るゝ計り不同雷に時の移りをぞ上てゝりける日本の諸將廿隻の向ひ海上皆三十五六町を隔て安高麗と云湊ふ乘渡る蜂須賀阿波ちゞ中船ふ各集りて評議もとの波ちゞふ拵あの山のおとくるふ數多艘の大敵日本ハ僅の小船小勢ふて乘合せ戰んず成難し所詮此ゝの舟軍ハ指置て陸地ふ付國中を侵し然るべしとありしに太田飛彈ち云ゝ眼前の敵を見ゝぬ陸地の敵を計いんとハ事平ゞ分別ふハ得のゝし各此河と有ゝまゝ加藤左馬介進出て云けるハわのごとく此大船其まゝ捨置ふ於てハ釜山海表種の味方の乘出し日本より渡海の兵粮船を取奪し左ゝバ味方の軍士上下飢ふ勞を然ゝし不肖の某未座の推參ふ先年文祿元年の頃征伐ふ御奉行石田治部少輔和分別の中案を背き主計頭清正ゞ家臣ふ任せ捨牙の働忽勝利を切ゝと云共御奉行成ふ依て石田偽りの言上實儀なりとて清正ゞ忠節ハ空く剃えき勤氣を蒙りぬ此度ハ淡の出まりの上知を貴ふ載度の働き仕ふ於ハ曲事ふて御仕上の上ゝ御

直ふ取り上げ給ふ如何相共に差引次第たるべしと云ふる諸將疑
然として物ふ者一人もあらざりけるに左馬介嘉明飛彈守
向く某少し乗出して敵船の相并巡見致しやんやと伺ふに
ハ飛彈守諸大名敵の大船ふ辟易し進まざるを見及て左馬
介ふ目くせしたるうちと乗出して巡見せられと蒼々長る
介ふ奉行の下知を受けて我舟ふ乗移り静ふ磯を引上げ
手ふ毛利を交る言々ふ又いや左馬介卒尓の働せんさえよや
各相談も来極らざる味方崩しの拔駈を一興と云ふまじ左
馬介叫ぶくと打笑いて一列あるを待山のごとく乗ふ大船ふ某お五
枚帆の小船ふていぐく卒尓の成べよや奉行者田後の下知と

て巡見ふ出るとりと云捨く二町漕り乗出しる飛彈守我乗
船の小鷹丸ふ乗移るを見く高津又七郎我舟ふ飛乗急ぎ磯
を漕ぎ揉ふもんく乗出し雑頭の手後を是を見て又七郎無
なり乗止べしと大音聲ふ下知をいく共源を振向く氣色も
なく三町計の内外ふてはや典厩舟ふ墨を並べる極ふ押
付るりけるバ典厩矢倉の棟ふ飛上り鳥毛輪ぬけのる鉾を指拳
味方をばけと下知しるまバ飛孫七舟の矢倉ふ馳上りて五人ふ除
熊の棒七幅ふ白きのもとん付さふ馬験を振上て左馬介又七郎
討する左ばけ兵船と大音の下知ふ隨く安高藤の漕せ寄しと
乗漕する味方の兵船陸綱を打切く我劣らじと乗出し敵

の大船に悉く乗付るゝ虎り共いへども味方の舟より敵船のさゝ
ゝに成て二間柄の槍さへ未届ぎるを覚悟に及ばず敵方
よりも日本の船八敵の大船の櫓の下へ乗付るに依てもべき様な
かりける味方の諸軍士格武略を尽すといへども更に及ばざく
見てとるとゆへに軍兵共小筒を以て敵船を打て水夫に櫓柔と
云へども火矢と射る炮烙火と数を尽して打込るもこの敵の番
船の中に駭しく云散しかける火薬に火移りて雷よりも怖
敷響渡りて焼くち三重三重にしき渡る中の板軍兵共に
海中へ刎落に照りに照りる日和に成て此の外に焼るもこの舟底に
居る軍兵水夫おそれ船中にたまり得ず最後左右の海

中に飛入死にける年の刻の比より未の刻の終まで二時計りの舟
軍に焼破乗取る朝鮮の番船一百七十四艘の内軍士も少く討
取ぬ数某の大敵に山のごとく成た船るもこの孟賁夏育が力を
尹鋼周瑜が謀を以ても討勝難き所に大君殿下の聖運泰山よ
りも重く金鉄よりも堅きが故に思の外に勝利を得法卒の軍兵
も勝に乗ける残る数船八四方へ面に退散を為に孫重佐渡守高
虎が嫡藤堂仁右衛門尉佐渡守先陣に在しが傍輩の義を思に
左衛門尉に向て云るゝ諸手残らず舟を乗る名せしかに言る
虎舟一艘も取得ずして手ぶらと徒に帰ぬ事を恥ぬ何の面
目有て後日に人に見えん某に於ては快く討死し生前の恥

をとさくせんと云々れば孫高堅く制して曰く嗚呼の高名八せぬ
ふるまひなく其上今度の口合戦今に限る色々と云ふまどろ
仁左衛門尉烏獲を欺く勇士なるまゝ無理に退かてそ進ける先
ふ敵船三艘引さがり退くるを陸ふ押寄上りけふと仁左衛門尉
推うけ其舟一艘引分てそ廻りける五里六里の海上に流を漂
る兵仗八鱗よりも多けり血八潮を染ふして忽ち紅の波
を流し骸八波上ふ漂ひ浮く沈くりけまバ呉魏赤壁の古く宋
元黄河の争を今目見るとぞ思ふる十六日諸将竹島の城ふ集
て七人の口奉行軍ひと会議を抑昨日の舟合戦八乗出さてるハ
遅ありなとどとも敵船早く乗分ふるを海津又七郎ふりと

て一番と定めらる乗出せ八早りぶまども舟遅くして敵船ふ少
し遅く乗付けるとて加藤左馬介二番と秋月三郎左衛門三番
毛利吉成四番と定め大小名家中ふこの名共を実検し首数百
十一軍中始終の為能委細注ふ書記し十七日早天使番の早船を
日本ふ言上ふて諸将竹島ふ滞陣し手負人を看病し舟軍ふまぐれ
し兵具を用意し舟の櫓楫をぞ調ふ扨高農国中働く人数を定
む船手ふ働く軍船ふ奉行ふ熊谷内蔵允早川主馬首并毛利宰相九鬼
大隅吉寺沢志摩吉長曽我部土佐吉池田伊豫吉小川左兵衛中川
修理大夫伊達民部大輔立花左近大夫脇坂中務少輔帰島出雲吉管
三郎兵衛尉同右衛門尉毛利中納言輝元ふ名代完戸備前吉安国寺陸

路八三手ニ別て働く七ヨ表ニ働く軍勢八西奉行太田飛騨ト加藤主計頭ト人ハ上ニ向て働く定ル陸中筋の軍勢ハ奉行小中伊豆ト并加藤左馬介蜂須賀阿波ト生駒雅楽ト毛利吉成ト同共ニ島津又七郎秋月三郎高橋九郎相良左兵衛佐一手ニ成て東ニ向て働く極ル陸手南筋ハ奉行毛利民部大輔并浮田中納言小西摂津守ト共ニ佐渡ト羽柴兵庫頭各一手ニ成て東ニ向て働く黒田貢秀詮公紋仰付ル廿八日右の諸将ハ島を出船ハ唐島の迫門を押渡アヤ川と云川面十八九町の大河を上リ上ル七日押上ル八月四日忠清道ウレンと云所ニ着陣ス其道六十里陸船ヨの熟軍ウレンニ成ル野陣を敷て五日逗留ハ船中ニ成ル馬の足を休め陸陣の用意ハ上ル山谷



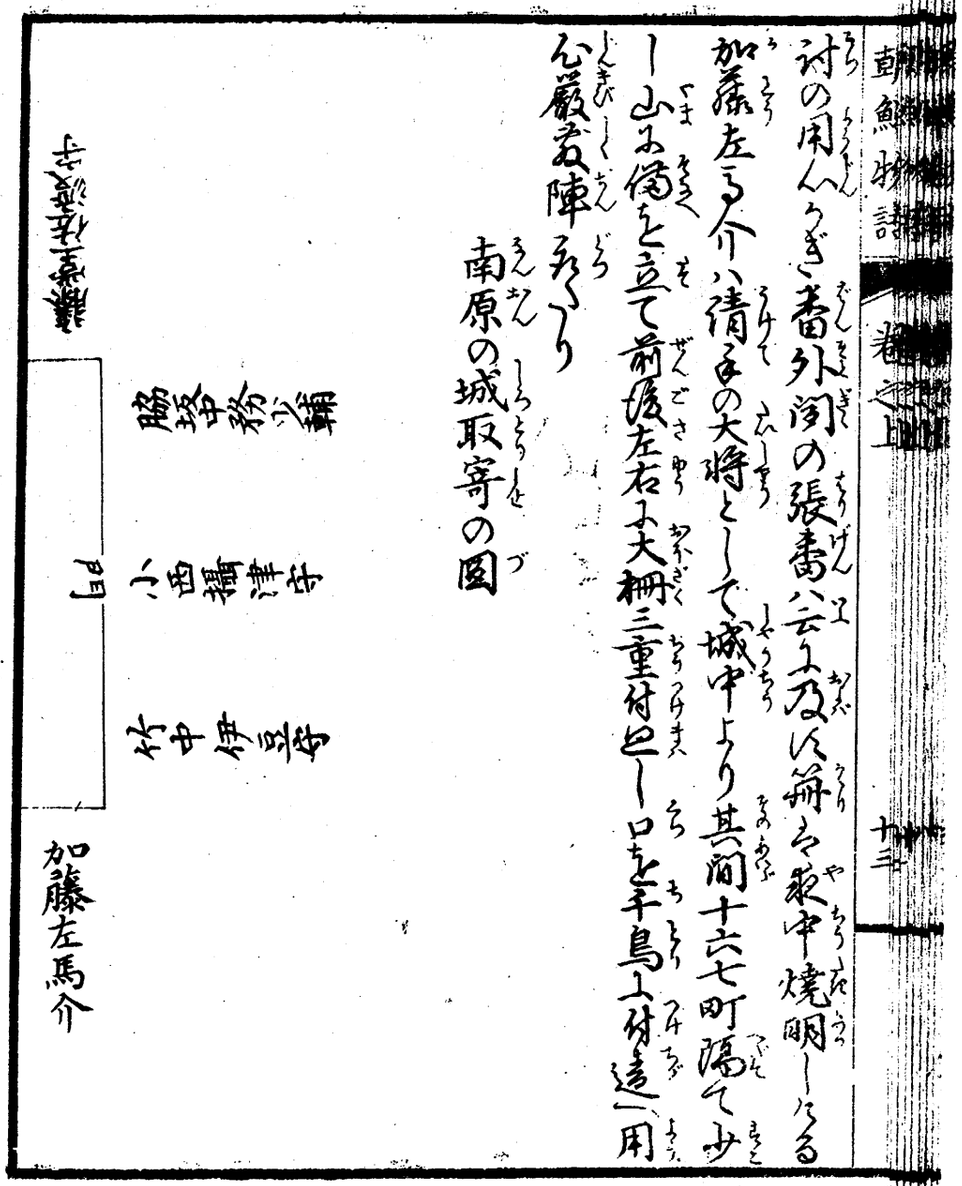
ニ孔ハ男女傷俘餘ヨ捕来る其中ニ人体ハ帯ニ勝まてゝ成シヤグン（イニ者歟）あり國中の所ゝ通路を塞て具ニ寄けるハ者冠蓋て見ヨリ道中十八里を隔ル忠清道南原の城堅固ニ城ハ城主ハ南原判官ト云二万三百余騎の大将ト成リ加勢ト成て慶州判官二万余騎の大将ト成て五万ハ成ル陸ヨ舟ヨの諸ハ寄集て評議ニ曰南原ハ高麗城堅固ニ事危キ成ル間ハ舟手ハ指加ハて押寄ル上ハ取国と云ハ伊豆ハ成ル舟ヨの軍兵各陸ニ上リ彼ハ兵ハウレンの湊リ繋ぎ置ハ必ス高麗の番船乗出して悪く舟と焼破ル成ル若左ト有ニ於ハ舟ヨの軍役ハ何勝ル成ル其上各馬を立来ルを見て

ばるに上下弓杖ゆるぎり十八里の道中出立の仕合まことしやかに次
第今百姓殺植落といふことも秀吉公の御勇武天下に勝れさる物
給へば公の御威光をもて神明佛陀の冥慮にかなひ奉り怠り責破て
両判官を討ちんと勇進ぐ云へば諸將一同に潔能も云ひ急き角
もいまものの仕方引次第とぞ答る然して伊豆守隆重内藏允主馬
首に向て云へる八南原落城一左右の間々舟手の軍勢各ウレンに在陣
せるべし彼地善悪の言上せしむる押ての軍兵を釜山浦まで引
く遣事成難し舟手の内若も馬立越まてふ方あらば二三人南原
の城に入て同道せべしと云り脇坂中務少輔伊藤氏治大浦帰島
出雲守三人進出て我馬と持ち供中らんと云極りなに

菅三郎兵衛尉同右馬八郎兄弟も四奉行に請てぞ南原に赴く八月
十日諸軍ウレンを立て押寄の形儀正しく貝鐘の相図法度を堅
約して昼夜の境もなく十八里の其道を揉に揉んで急き行く久しく
舟に立ちもふ法勢の馬岩巌石の難所の山坂を云ば一息も
休ず乗狂小或を乗殺し乗倒し死る馬々数を知らず翌十一日の
寅の刻ばかりに南原の城近く寄せめぐりと云へ共以の外霧深く
の遠を計難に依て生捕に尋て城にも三十余丁ばかり外の坂の麓に
旗を立霧の晴るを待ばかり来の刻ばかりに四方明に成ぬれば城十四
五町前小屯をとり明十二日の曙の霧と味方に城際へ旗をとり寄せ
西南北を取囲む勢軍の表に八柵逆茂木を付し昼の馬ばけ夜

討の用ゝうぎ番外閉の張番八云ゝ及ゝ鉾を敵中燒明しける
加藤左馬介ハ清正の大將として城中より其間十六七町隔て少
し山を後を立て前後左右ゝ大柵三重付巳し口を千鳥ゝ付造用
心嚴敷陣を取ける

南原の城取寄の図






柳川城の高低二十五町四方有て大石を以て高サ二間中の石垣のり

堂ふ築いて石垣ふたつ入れあと法のてくれば焼物ちどくあり上ふ塀を
掛口一方ゝ隅ゝ二重三重の櫓をとのげ四方上高サ六七間の石の大門を
たて大南の桟木を以て格子の扉を作り堀口五十間の四ゝ堀の中に
堀あり上塀とのけ口一堀内外のゝ堀上狭の車びしを明るく
くまなくちらゝし塀裏の櫓小石火矢大弓大鉄砲を仕うけ四方八面へ
打出し手口の小筒を打矢を射出し車雨雲の如くとく東西
来仕寄の用意を見て取然ども南表の三ヶ月十二日の夜ふかり
竹たばを付初て長く仕寄をなる堀の塡草叉り桟子悉く用をこして
十三日十四日ふかく仕寄をし既ふ堀際まで付かぬ去共丈
夫成城郭ふ数条の剛兵楯籠りそうもバ輙く落ん事中ゝ及



難く見ゝ分ふ如ふ佐渡ちが軍士藤重俊兵衛尉後成細弓上て
わゝ火矢を放ちけるがたとひ焼草を持うけ火を付うり共焼
付魚ふ上わゝちふふ彼火矢上て来申の角櫓を焼立てうり
飛弾ちが軍士是を見て火矢上ゝ焼立と云ふ事ふ思ひも寄
らちふまゝ大河内茂右衛尉田中小左衛門尉ふ向ひ云ふる藤
堂殿ハ乗入をうると見ゝて櫓を焼立ゝるぞやと云ハれば田中
関もあゝ堂ゝ乗ゝるうりと云ふ尾ふくゝ堀あやまゝぞ入ける夫
河内九津見兵蔵清水弥一郎豊島金左衛弾塀添四郎押法
ひて飛入堀の中ふ塀を乗越石垣ふ付ゝるをふ塀登桟
を持居ゝるが我組ひるうり一貴志六左夫を呼て待居うり大